

# オーレ口通信 54号



改装工事が完了しました♪  
今年は戌年です☆

カンパありがとうございました！

《活動費カンパをいただいた皆様》

東京シュレ奥地さん ラミ中小野さん フォーライフ中林さん 木村さん ふく彗さん  
久下さん 草山さん 神阪さん 坂口さん 光榮さん さとちゃん 柴垣さん 玉木さん 永井さん  
中嶋さん 坂本（郁）さん 加藤さん

《改装費カンパをいただいた皆様》

まこちゃん 大石さん 河本さん 清重さん はまじ まきさん 屋菅さん くにちゃん 森田さん  
(順不同)

郵便振込み 01120-9-81163 神戸フリースクール

※15周年のお祝いもいただきました。皆様のお気持ち、  
本当に嬉しく思っております。どうもありがとうございました。

## ☆フリースクール改装費カンパ 第2弾

もうすこし改装費が不足しています。ぜひカンパ  
第2弾よろしくお願いします。（詳細はチラシで）

## あとがき

フリースクールの改装工事が終わりました。一階のシャッターを取り外し、壁を取り壊し、以前より外側に玄関を作ったので、かなり広くなった印象を受けます。それと、以前物置にしていた風呂場を取り壊し、小さな事務室（職員室？）が出来ました。入った瞬間に“広くなった”と感じ取れるくらい変わったので、ぜひ一度リニュアルしたKFSへ足を運んでください。

フリースクールが神戸に移ってから8年が経ちました。僕は始まった時からいますが、内装や外装は少しずつ少しずつ変わっています。今回の改装では、一階はまったく違う空間になりました。しかし、雰囲気はあまり変わっていません。最初に見たときは戸惑いましたが、すぐに目が慣れてきて「ああ、やっぱりKFSやなあ」と思っています。よかった。雰囲気が完全に変わってしまうのは寂しいなあと改装前に思っていたのですが...大丈夫でした。KFSはKFSのままです。

けんた

## フリースクール スタッフ養成講座

・3月4日～5日（プラス実習）

・場所 東京スポーツ会館

・費用 ¥20,000万円（宿泊費含）

☆申込・主催

フリースクール全国ネットワーク

03-55624105/2505

申込締切 2月24日

H.P - [WWW.FREESCHOOL.JP/KFS](http://WWW.FREESCHOOL.JP/KFS)

MAIL - [TOKASYA@HOTMAIL.COM](mailto:TOKASYA@HOTMAIL.COM)

お問い合わせ TEL・FAX 078-366-0333

住所・兵庫県神戸市中央区下山手通8丁目8-10

※オーレ口通信の一部、または全文の無断転載を禁止します

KFS

KOBE FREE SCHOOL

## 不登校なんて、もう言わせない

田辺 克之

不登校なんて、もうこうとさらに区別する必要のない時代が来るだろう。それがいつのことかわからいけれど、きっとそんな教育の自由化の時代が到来するのはまちがいない。いま教育者らの多くは、学校というシステムをどう改善あるいは修復するかに力を注いでいるが、一部の専門家は、すでに学校というシステムの限界に気づき、改善ではなく、解体を説く人もいる。

学校というシステムを解体してしまえば、不登校という言葉自体が消滅する。じゃどう解体するのか。文部科学省があり、教育委員会があり、教育長・校長、教頭、教諭がいて、学校という器があって、成り立っている学校制度。ピラミッドのような階層があって、年功序列のはっきりした制度がある。システムそのものが閉鎖的・保守的で、外部からの批判や意見を受け入れる柔軟性に欠ける。子どもの教育に必要な自由や多様性や対等などという最低限の権利も十分に保障されない学校という城砦が、市民社会とはかけ離れた場所に聳え立っている。学校内の事故や事件で子どもが亡くなるケースも出てきている。学校が危ないと言われて久しい。にもかかわらず教育委員会の体質・態度は変わらない。さあどうしますか？わが子をこのまま安心して「学校におまかせ」でいいのでしょうか。

親が学校に子どもをまかせすぎという意見もあるが、戦後教育の内実は、子どもの教育を独占するべく、親から子どもを奪い、学校の教育権を奪い、学校にこそ教育が存在することを示すことであった。そういう意味では不登校とは奪われた親の教育権を取りもどす運動ということができる。最初からまるで親を信じていない国家教育が存在し、それを義務教育と言ったり、民主主義教育と称して、産業復興に寄与する人材育成に力を入れてきた。子どもの人権など考える余裕もなく、ひたすら勤勉な国民を再生産することが目標とされ、学歴社会を形成してきた。その結果が、管理教育であり、体罰・いじめ・学級崩壊であり、結果として不登校の増加となった。突っ走ってきたけれど、こんな結果になってしまいましたが、教育者は子どもたちに報告すべきであろう。

最近やっと、文部科学省も公教育の限界に気づいて、民間のノウハウを学んだり、民間に委託したり、歩み寄る姿勢を見せている。現実には、関東では東京シユレがNPO学校の開校を認可されたりしているが、単なるポーズに終わらないように願いたい。このような学校システムに大人よりも敏感に反応し、態度でNOと表現した不登校生こそ、新しい時代の教育を予言する人たちかもしれない。預言者や先駆者といえは、旧約の時代から、たえず時の権力者や実力者に邪魔者扱いされ、ひどい仕打ちを受けてきた。現代の預言者たちも同様に、身にお覚えのない中傷や罵倒の中をかいくぐり、人権をおびやかされつつも、最低の待遇に耐えている。しかし彼らは、その人生を不運と後悔してはいないし、報われないことを呪ってもいない。かれらはひたすら春を待ち望んでいるのだろう。

## フリースクール体験

A. Y.

学校では、みんな同じ靴に同じ制服、靴下までも個性とか、自分らしくって言うても、みんな一緒で何が？どこが？って聞いても、誰も「私のほしい答え」じゃなくて、「あたりまえのこと」とか「ふつう」とかって、じゃあかわらないの？とか心の中で浮かんできて、私は私の目標がほしい。てなかんじになつていったと思う。ここに来た時は、すごいなー。とか、いいなーって。

みんなやさしくって、自由で好きなことできて、学校じゃあできない勉強ができる場所？  
毎日が楽しいと思える場所だと思った。

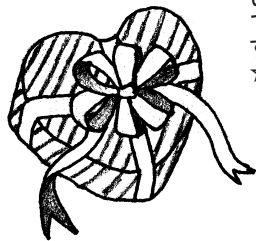
「いろいろ」

サユリ

フリースクールへきて二ヶ月ちょっとですが、いろんなことが経験できてよかったです。  
友達ができて徹○トークとかめっちゃ話したり、ブイクラをとったりして楽しいです！！  
友達がニュージラランドへ留学するのはさみしいけど、がんばってほしいです！！

ウオーターボーイズの頃から徹○が好きで、11月の握手会でもっと好きになって、去年のイヴはWatと過ごせたことや、メジャーデビューしたこともあった♪  
紅白んときマイクが倒れたけど徹○が必死に歌っていたのにじゅんときました。去年の15周年祭のバンドでは歌詞をまちがえずに歌

えてヨカッタです。  
これからもフリースクールでのんびりとやっていきたいです☆



## 「おいてけぼり」

不登校の子と軽度発達障がいの子では、学校の中でどちらが熱心に課題として取り組まれているのでしょうか。実際のところ、私にはわからないのですが、感覚的に考えると、軽度発達障がいの子もなかなかあななんて思ったりしています。学校の中で苦労を抱えている子と、学校に行けない子・・・先生たちからすると、学校の中で顔が見えるほうが接しやすいのかなあなんて。“特別支援教育”（軽度発達障がい児のため）のモデル校（公立学校）はあるのですが、不登校についてもあるのでしょうか。（どなたかご存知でしたら、教えてください。）「うちの学校では、不登校の子を受け入れてくれるところならどこでも、出席扱いを認めています」なんていうモデル校ができたなら、それはすばらしいモデル校だと思いますか？なんだか不登校が置いてけぼりになつていような・・・そんな気がする今日このごろです。

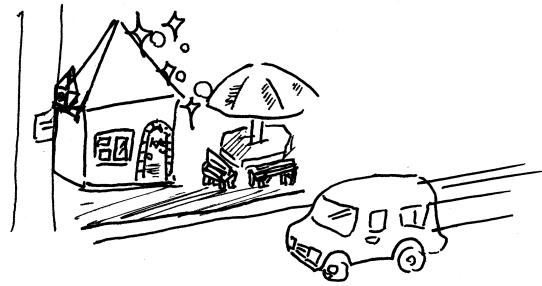
(ち)

## 未来劇場「無言電車」

## 大槻 未来

のどかな風景が流れていく。僕と運転手しか乗っていない電車ゴトゴト走っている。

朝、母さんから聞いた話だとおばあちゃんが死んだらしい。おばあちゃんっ子の僕には信じられない話だった。「おばあちゃんのお葬式を見るまで僕は信じない」



い！」と、心の中に深く深く刻み込んだ。

おばあちゃんに住んでいる場所は僕の家から電車で二時間かかる。しかも、駅から徒歩で四十分かかるのだ。僕は昨年の冬休みまで毎日通った。家に一人でおばあちゃんがかわいそうだと思ったからだ。でもその事をからかわれておばあちゃんの家に行くのをやめてしまった。おばあちゃんには一年以上会っていないことになる。

無言電車の中。僕の降りる駅が来た。ここから四十分……

事件が起きたのは二十分くらい歩いたところだった。というより、集会所を通った時だ。集会所があったのだ。村の人たちがいつせいで出てきた。そこまではいい。問題はそこの中におばあちゃんがいたことだ。

「お：おばあちゃん？」

おばあちゃんはおどろいた顔をした。けれどすぐに嬉しそうな顔をした。

「正史？正史なのかい？」

正史とは僕の名前だ。やつぱりおばあちゃんだった。

た。それから二十分、おばあちゃんの家に行くまでに、これまでのいきさつを話したら、おばあちゃんが母さんに電話で、

「最近正史が遊びに来なくて寂しいのじゃ。」

と、言ったという話しをしてくれた。

おばあちゃんの家についてからは、いろいろな話をした。楽しい時間ほど早く過ぎるものはない。僕はおばあちゃんに、

「今日からまた毎日くるから。」

と、おばあちゃんに言っただけで、四十分かかって駅に戻った。電車を待っていた時、母さんから電話があった事



に気がついた。伝言を聞くと、「もしもし？おばあちゃんに会えた？あんなうそを言わないかぎり、おばあちゃんに会いに行かないでしょ？」

と、言う内容だった。さすが母さん。自分の息子のことうよくわかってんじやん。

無言電車の中。僕は自分に戻れた気がした。もう一度からかわれても、ぜったい毎日日本当におばあちゃんが死んでもおばあちゃんに会いに行くと無言電車にゆられながら神様に誓った。

end

## 不登校の娘とともに

S・K

中二の六月半ば頃から、ぐずぐず言い出して、二期から朝になると、「頭が痛い」「だるい」と言っ学校に行けなくなりまし。九月から二ヶ月あまり、学校の先生のアドバイスを受けながら、いろいろなところや人にあたってみました。

神戸フリースクールへの出だしは良くて、「自分が出せる」「二つ家があるみたいや」と言っています。青雲高校へも行きたいと言っていますので、温かく見守っていきたいです。

## マリママの話

2年前、初めての親の会で田辺先生に泣かされた。学校にこだわる私に「それは不登校を半分しか認めていない」「別に明日から来なくてもいいよ」と言われた。私は先生を思いっきりにらみつけた。あの時なんで怒って帰らなかったんだろ……。

麻里が選んだ場所だから……というのはもちろんある。

いろいろな麻里のことを話す先生が、たった2週間の間に、よく本質をみているなと思った。そして、そのまなざしに愛情を感じられた。あともうひとつは「とにかく自分にまかせなさい」とは言われなかったから。

麻里がFS生活に慣れて、ありのままの自分を認めて、本来の生命力をとりもどせた頃、親も子も「育つ場所」は学校でなくてもいいんだ」と心から思えるようになった。

その時、それまでマイナスに見えてたことがプラス

に見えてきた。

だから、今悩んでいる十代の人々には、いろいろな道が広がっているから、ひとつが合っていないくてもあきらめないで伝えたい。人との出会い・場所との出会いがきつとあるから。自分を信じて、力をたくわえていてほしい。

田辺先生、正直に言うところのあの悔しくて3日間夜眠れなかったけど、今はガツンと言ってもらえたことを感謝しています。

これから迷える子どもたちと親たちの力強い味方でいて下さい。

## 15年という歳月

うらら

祝15周年。

娘も同じく15歳。

思えば生まれたときは小さくて無力で、私なしでは何もできない赤ちゃんだったのに、子どもはあつという間に大きくなる。

自我が芽生えてくると、自分で行動して、感じて、考えて、少しずつ私から分離していき……そんな子ども

の成長は嬉しいもので、反抗期だってまだまだ余裕の想定範囲内。

ところが、親離れ宣言はある日突然突きつけられる。生意気にも「全ての決断と責任を自分のもの」と。ここにきて「私の知らない娘の世界」の存在を認識する。娘≠私。わかりきっていたことなのに、何故か受け入れられずに、ジタバタ。いつの間にか彼女は私からの出口を見つけたのだらう、オロオロ。

不登校、過去の自分との決別、親の知らない交友関係、未知なるものへの憧憬、将来の夢……

子どもから大人へ娘がそのために感性を磨いているのだとしたら、たとえその先に何が待ち受けていようとも、私は道を譲らなければいけない時が来ているのかもしれない。娘は親離れを、私は子離れを。

5年後、二十歳の娘はしっかりと自分の足で立っているだろうか。



通学定期って  
何でしょうか。

私は、「証明」のひとつだと思っています。子どもに、中学生としての安心して学び生活してよいのだよ、と大人が認めてやるその証しです。基本的にどんな子どもにもそれを受け権利があると思います。

学校に通うのにバスや電車が必要であれば、通学定期を利用します。ならば学校には行けないけれど、代わりにはフリースクールに通える、という子どもにも同様に通学定期を認めていたきたいと思っています。

1枚の通学定期が子どもに与える安心感は計り知れません。「大丈夫、あなたはそれでいいのだよ」という温かいメッセージを込めて不登校の子どもにおくっていただきたいと思っています。

皆と同じではないけれど、それでも学校は（大人は）自分を認めてくれてい

る、という思いは、子どもに大きな安心感と自信を与えるものと信じます。同時に、学校とは違う場所でも過ごす中学生生活に大きな意義を与えてくれるにちがありません。

そして親の立場から。家にこもっていた子どもが一歩外に足を踏み出し、フリースクールという居場所を見つけてどこに通う、ということができる嬉しう、希望に満ちたことである。毎日元気に前向きに過ごすための、交通費の出費は必要経費ではありませんが、学生が受けるべき当然の権利は、同様にフリースクールの学生にも与えていただきたく思います。親の負担が少しでも軽くなれば本当に助かります。

通学定期をフリースクールの子どもたちに！



(J・M)

神戸フリースクールの皆さんへ

やぶきまり

現在、2006年1月12日。私、15歳。

その私が、ニュージラード（NZ）に高校留学する事になりました。

出発日は25日。あと2週間です。

それまでの間、お世話になった神戸フリースクール（KFS）のみんなに何か出来る事はないかと考えた結果、私がKFSと出会った時から今まで思っていたことを素直な気持ちで文章にして伝えるという事でした。

初めてKFSと出会ったのは、3年前の秋、西宮で行われた集会に参加して、「ここだ、ここだったら私を救ってくれるはず。」と直感的に感じたので12月1日に母と初めて見学に行きました。

当時の私は、不登校をしている事を悪い事だと思っていて、ほぼ1日家中に閉じこもっていたので友達と

遊ぶ機会もなく、孤独だと感じる事が多く、絶望感から死にたいと何度も考えていました。

そんな時に偶然KFSと出会って見学に行く、とてもリラックスだったアットホームな雰囲気だったので逆に戸惑ってしまいました。でも、みんな私に優しく接してくれてだんだん安心してきて、KFSが気に入ったので入学する事を決めました。

それから毎日通うところや友達が増えていけばよかったと思うほど毎日が楽しくて、面白くて、刺激的でした。

学校に行っていたらできないような体験もさせてもらいました。

不登校は決して悪い事ではなくて、むしろ楽しむ事だとかわかって精神的にも本当に楽になりました。

そして2年前の夏、F.Sのスタッフや、一般の方も加わって1週間、フィリピンへ行き、現地の村でホームステイをさせてもらったこともいい思い出、そして

## - 考える種⑧ - 大石寿子

新聞の片隅に載っていた本の紹介文。作者のよしもとなさん自らが「王国」の第三巻発刊に際して書いていた文章が、私の心に飛び込んできました。

「人は生きていくあいだに必ずしもいつもその人に本当に合った場所にいるわけではなく、必ずしも本当に自分に合った人と共にすごしているわけでもありません。人生というのはそれを「調整」していく道なのかも…」

自分なりに経験してわかってきた事や想いの中からまとまってきた「人生」へのとらえ方が、はっきりに文章になって示されていたのを読んだ喜び。そうなんよ！ こういう事なんよ！とうれしくなってそのコーナーを切り取っておきました。そして、「王国」まとめて3巻、またしてもイッキ読み。不倫とかゲイとか結構生々しい設定もあるけど、何故か俗っぽさを感じさせない、全体に流れる透明感。恋愛小説のようだけどそこにとどまっていらない、作者が「ファンタジー・おとぎ話」というふうに表示しているのもうなすけです。主人公と一緒に山奥で暮らしていた、薬草のお茶を作る魅力的なおばあちゃんなんて、まさにファンタジーの世界。植物園で働く恋人（結婚している上、少年時代から心をつかわれている女性がいる）、占いを生業にしている目の不自由な美しい青年や、その恋人で彼の仕事をサポートしている社会的にもきちんとした居場所を持っているらしい男性、主人公が自分には合わない、落ち着かない場所（街の中）そういう人達と関わりあひながら生きていくうち、少しずつ折り合いをつけて自分らしく生きていけるように「調整」していくお話です。人と人との心の距離の取り方はむずかしく、近づきすぎると苦しくて、離れすぎてもつらくて、お互いにとって一番居ごころのいい距離がわかるまで、なかなか時間とエネルギーがかかるものです。思い通りにいかなくて、無理になんとかしてしまうと結局大事なはずの人の関係を壊してしまったりもする。親子、夫婦、友達、恋人、どの関係も全くの他人とよりもむずかしい。でもやっぱり誰かと心を通わせたい。それは生きていくのに必要で、とても重要な事だから…。

もしそんな事で悩んでいたら、答えなんか書いてないけれど読んでみて下さい。人間関係のあたたかさを感じて、読んだ後、しあわせな気持ちで胸がいっぱいになって、うん！ また元気出してやっぴう！ っていう気持ちになるとおもいますよ。

ひとつのきつかけとなり

去年の春、初めて高校留学という道があることを知った時、私は幼い頃から海外に興味を持っていたので「行きたい！」と思いを伝え、そして両親にそのことを理解して応援してくれることになったので留学団体を探す事になりました。

私はアイルランドがカナダに行ってみたいと思っていて、そのどちらかの国を留学先として考えたのですが、最終的にはどちらの国も留学先としていなくて、不登校生の留学に力をいれている団体と出会って、「ここで私の留学生活をサポートしてもらおう。」と思いました。

まずは短期留学をしてみる事になって、留学先はのんびりとしたイメージがあるNZに決めました。出発日は9月7日、そして1ヶ月間滞在する事や、1人行くのが不安だったのと同じオーランドへ行くと、愛知県に住んでいる高

校生の女の子と一緒に行事、そして滞在中に通う語学学校、お世話になる現地のスタッフがホストファミリーが決定したという報告など、出発までの準備が少しずつ進んでいた頃不安で仕方なくなり、少し食欲が落ちたと感じる時がありました。辞めるといえたならどんなに楽だろうと思ったり、そして実を言うとまた、わけもなく死や自殺を考えてしまう自分がいて、本当にあの時期は辛く、苦しかったです。

でも、最後には「行くしかない！ きつとなんとかなる。」と信じて自分で自分を励まし、出発当日を迎えました。

次回へ続く。

